

平成 28 年熊本地震での戦争遺跡被災状況と震災遺産としての保存

高谷 和生 *

1. 緒 言

平成 28 年 4 月 14 日・16 日熊本県地方を襲った二度にわたる最大震度 7 の激震、4203 回（県集約分、熊日まとめ 12 月 28 日現在（註 1））を数える余震で、特別史跡「熊本城」、城下町を形成した「新町・古町地区」の街並み、国重要文化財「阿蘇神社楼門」、熊本の近代を形創った洋学校「ジェーンズ邸」をはじめ、県内の多くの文化財、未指定文化財が被災（註 2）した。

ここでは未指定文化財が多くを占める太平洋戦争期の戦争遺跡の被災状況について、被害が集中した熊本市東区・南区、上・下益城郡を中心として報告を行い、陸軍隈庄飛行場油倉庫・弾薬庫の戦争遺跡・震災遺産としての保存に向けての動きを報告する。

2. 熊本県内の太平洋戦争期の戦争遺跡の現状・特徴

本会でこれまで確認した県内戦争遺跡総数は、多数の特殊地下壕を含めた 723 件である。15 年戦争期の県特徴として次の 7 項目があげられる。（註 3）

- ①軍都熊本市の軍事施設 ～熊本城から東部の大江・渡鹿地区への軍施設の移転～
- ②九州で三番目に多い陸海軍飛行場 ～本土決戦に向け、

地下にもぐった飛行場施設～

- ③東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所 ～軍直営の石炭を原料とした黄色火薬の生産～
- ④三菱重工業熊本航空機製作所の本工場と学校・地下工場 ～陸軍四式重爆撃機「飛龍」～
- ⑤本土決戦のための天草地区の三砲台、震洋とマルレの特攻艇基地と人吉地区の地下工場壕群
- ⑥県内各地に残る空襲被災の「被害の歴史」
- ⑦朝鮮人や中国人、連合国軍俘虜労働の「加害の歴史」

今回の熊本地震での震源域が、布田川断層・日奈久断層帯での直下型地震であったことから、熊本市を中心とした県央部の戦争遺跡の多くが被災した。

3. 熊本地震での被災状況

今回の熊本地震では、余震が収束しつつある 5 月連休以降、地権者承諾等をとりながら、可能な限り現地で見し内部入室し、肉眼で被災状況を確認した。図 1 にあるとおり、7 月 9 日集計で 31 件の被災である。（註 4）

(1) 建造物・記念碑・資料館：25 箇所

第六師団長官舎門（現高橋公園・市熊本城管理事務所）で管理・倒壊・破損：復元要望書提出済み）、第六師団長

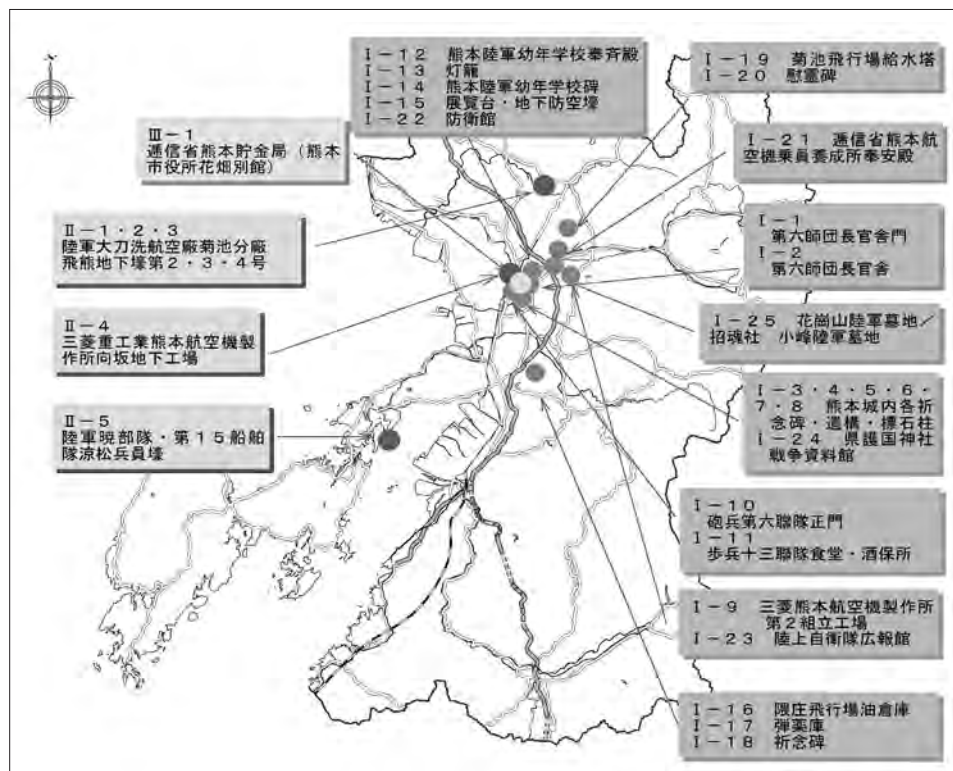


図 1 平成 28 年熊本地震で被災した太平洋戦争期の被災戦争遺跡の位置図

* くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク代表・事務局長



写真1 第六師団長官舎門の倒壊・破損
門柱部の倒壊。熊本市中央区高橋公園。



写真2 第六師団長官舎建物の破損
屋根瓦落下、壁剥離。熊本市東阿弥陀時町延寿寺寺務所。



写真3・4 歩兵第十三聯隊食堂の亀裂等
ホール各所天井部に亀裂、小部屋天井の落下。熊本市中央区 大江。熊本学園大学第2体育館。



写真5・6 菊池飛行場花房給水塔のモルタル剥離
6本ある柱の西側柱及び受水部モルタル剥離。菊池市泗水町。



写真7 陸軍大刀洗航空廠菊池分廠飛熊地下壕第2号壕の崩落
壕入口部の天井落下・崩落。菊池市泗水町飛熊。



写真8 陸軍隈庄飛行場記念碑の倒壊
平和の祈念碑「碧空に祈る」。熊本市南區城南町舞原。

官舎（移転後に延寿寺寺務所として利用・内部亀裂瓦落下）、熊本城内馬魂碑（倒壊）、熊本幼年学校碑（倒壊・破損）、幼年学校基礎遺構（亀裂）、御駐驛之碑（倒壊）、輜重兵第六聯隊跡碑（倒壊）、陸軍所轄地標石柱（1本不明）、三菱重工業熊本航空機製作所第2組立工場（複数のボルト破損、一部鉄骨にひずみ）、砲兵第六聯隊正門（現白川中学校正門として移設利用・倒壊）、歩兵第十三聯隊食堂・酒保所（現熊本学園大学第二体育館、6/17より利用再開・大学で今年度耐震補強実施予定であった・

柱梁に亀裂外壁モルタル剥離）、陸軍熊本幼年学校奉斎殿（雄健神社・建物亀裂）、灯籠（倒壊）、熊本幼年学校跡碑（倒壊）、天覧台・地下防空壕（亀裂）、陸軍隈庄飛行場油倉庫（全損）、弾薬庫（亀裂）、祈念碑「碧空に祈る」（倒壊）、陸軍菊池飛行場給水塔（菊池市指定有形文化財・モルタル剥離）、慰霊碑（土台亀裂）、通信省熊本航空機乗員養成所奉安殿（今年度市指定文化財に指定予定・外壁大理石モルタル剥離）、陸上自衛隊防衛館（キャンプウッド時代の将校集会所・展示建物に亀裂ひずみ沈下・



写真 9 陸軍隈庄飛行場の正門跡

昭和 16 年撮影。正門には「陸軍大刀洗飛行学校隈庄分教所」の看板が下げられている。現在地は城南病院、門は消滅。

ケース破損)、陸上自衛隊広報館(旧三菱重工業熊本航空機製作所資料・展示パネル落下)、熊本県護国神社戦争資料館(遺品遺書収集武器・展示パネル破損)、花岡山陸軍墓地・招魂社・小峰陸軍墓地(20~30 基倒壊)

(2) 特殊地下壕 :5 箇所

陸軍大刀洗航空廠菊池分廠飛熊地下壕第 2 号壕(コンクリート施設発電壕・入口天井部崩落)、第 3・4 号壕(素掘り・天井部崩落)、三菱重工業熊本航空機製作所向坂地下工場(土砂流入陥没)、陸軍暁部隊第一五船舶隊涼松兵員壕(崩壊)

(3) その他 :1 か所

通信省熊本地方貯金支局(熊本市役所花畑町別館・窓枠 3 か所破損・内部は未調査。市解体方針)

4. 被災状況調査と救済事業等と陸軍隈庄飛行場油倉庫・弾薬庫の調査と被災状況

(1) 被災状況調査

今回の熊本地震に伴う戦争遺跡の被災状況の把握と対応は以下の通りである。余震が収束しつつあった 4 月下旬に「くまもと戦争遺産フォーラム」参加 8 団体による緊急調査を各団体関係者充てにメールで依頼し、1 週間程度で報告いただいた。基礎資料は、2010 年 4 月作成「県内戦争遺跡一覧表」の 82 項目・約 300 遺構である。この報告を基に、本会で被災建物等を実見し、5 月初旬に地元紙熊日新聞で速報報道(この段階では 7 件)がなされた。また、5 月中旬に申請予定であった各種助成金事業を組換え、「熊本県内戦争遺跡・遺物被災レスキュー活動」とし、その内容を「隈庄飛行場油倉庫・弾薬庫測量」と「被災戦時資料収集」とした。5 月 31 日・28 件の被災状況の 1 次調査・集計報告を行い、6 月 3 日には共同通信から戦跡被災記事の配信となった。4 日から隈庄飛行場油倉庫・弾薬庫の測量を開始し、その様子等は RKK 熊本放送、KKT 熊本県民テレビで被災戦跡のテレビ報道



写真 10・11 隈庄飛行場油倉庫の測量作業の様子

有明測量開発社によるレーザー測距機による 3D 測量と手取り作業の様子。平成 28 年 6 月 4 日

がなされた。

その間、6 月 3 日に戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表出原恵三氏の来熊による被災状況の調査、6 月 20 日には同共同代表の十菱駿武氏並びに文化財保存全国協議会橋本博文代表委員の視察等で現状の報告を行った。7 月 9 日に 2 次調査集計が終了し、最終数は先述のとおり 31 件である。

(2) 陸軍隈庄飛行場油倉庫・弾薬庫の調査と被災状況

今回の熊本地震で本会が対応している「熊本地震被災レスキュー活動」は、遺跡と遺物の 2 種である。ここでは遺跡に関して、最大の被害がみられた「陸軍隈庄飛行場油倉庫・弾薬庫」をとりまとめる。

陸軍隈庄飛行場は、熊本市南區城南町舞原所在で「舞原(まいのはら)飛行場」の別称あり。昭和 16 年 10 月頃に完成。当初は大刀洗陸軍飛行学校隈庄分教所として発足し、昭和 18 年 6 月には大刀洗陸軍飛行学校隈庄教育隊と改称。昭和 20 年 4 月、重爆隊第一一〇戦隊の配置がなされ、特攻機の中継基地となる。今回被災を受けた 2 件ともに、飛行学校で利用された建物である。

①油倉庫(地元では油脂庫とも呼称)

躯体はコンクリートブロック積み上げ壁、屋根コンクリート造、桁行 15.4m、梁行 4.3m、屋根高 2.5m を図る。単独 3 部屋構造、正面には片開鉄扉・換気孔、裏面には両開鉄製窓、下側に換気孔あり。建物は西南側壁崩落で、東側に緩く傾き、応急危険度判定結果は「危険」(赤紙)とされた。

②弾薬庫

躯体は RC 造、屋根は消失するが軽量のトタン葺きと想定できる。桁行 5.1m、梁行 3.9m、屋根高 3.1m を図る。入口上部に亀裂が入る。

両建物の測量調査は、測量会社(註 5)に委託し、6 月初旬より開始。現地での図化指示等をへて、8 月初旬に完成した。その内容は両建物の被災状況図・寸法図・窓扉等測量図・復元図及び 3D デジタル測量図(図 2~5)である。特に被災状況を詳細記録するために、建物 3~4 面での 3D デジタル測量図を作成した。この測量法は、座



写真 12 戦争遺跡保存全国シンポジウム長野県松代大会全体会での「平成 28 年熊本地震での戦争遺跡被災状況」報告の様子



写真 13 閉会式での「決議文」の読み上げ

標を持ち 1 秒間に 3 万点を計測する点群データを構成し、誤差は 150m 先で 4mm の高精度とし、両建物の全周を計測し、3 次元モデルでの展開を可能としたものである。

5. 震災遺産としての保存に向けて

これまでに戦争遺跡保存全国ネットワークおよび戦争遺跡保存全国ネットワーク四国、文化財保存全国協議会等の支援を受け、熊本地震の記憶とその伝承に関わる「被災レスキュー活動」を進めてきた。被災資料の収集活動は 16 件で、現在も進行中である。詳細報告は、別の機会に譲る。

8 月 21 日戦争遺跡保存全国シンポジウム長野県松代大会決議文「熊本地震で被災した“陸軍隈庄飛行場油倉庫・弾薬庫”を震災遺産の文化財として保存することを求める決議文」を基に、9 月 27 日熊本市長に「陸軍隈庄飛行場油倉庫・弾薬庫の近現代遺跡・震災遺産としての保存」を文書郵送にて要望。県には 10 月 20 日同趣旨で面談要望。11 月 10 日には改めて熊本市長手渡し説明による「震災遺産としての保存」を再度要望した。(註 6)

崩壊した油倉庫は個人所有であり、所有者は公費による解体を申請中である。現況では、熊本市の公費解体進捗が約 3 割と遅延しているため、油倉庫解体までには至っていないが、熊本市文化財保護委員会での計画的な審議をさらに要望したい。

6. 結 語

～復興に向けて、戦争遺跡・震災遺産として記憶に留める～

今回の熊本地震では、発生当初は、民間の救済事業が先行し、その後国・県等の事業が後追いした。

4 月 28 日には文書資料を対象に「熊本被災史料レスキューネットワーク」が、5 月 21 日には本会による「戦争遺跡・戦時資料のレスキュー事業」が、7 月 5 日には歴史的建造物を対象とした「被災町屋レスキュー相談活動」がスタートし、大規模災害時の未指定文化財の保存のモデルケースとなった。

一方、国・県による歴史的建造物対象の「文化財レスキュー事業」「ヘリテージマネージャーによる文化財ドクター事業」や絵画彫刻・工芸品、古文書、有形民俗文化財を対象とする「被災文化財レスキュー活動」も稼働し、約半数の応急処理を終えたが、初動の遅れの指摘も各所から上がった。また、未指定文化財の救済につながるであろう「熊本地震被災文化財等復旧・復興基金」も 10 月に設置されたが、配分対象はまだ決まっていない。

その後、報道では平成 28 年 8 月 15 日「終戦の日」の特集として、産経新聞「熊本地震戦争遺跡 31 件損壊」記事、熊本日日新聞「終戦の日 震災に重ねる平和の尊さ」社説の両者が取り上げ、戦争遺跡被災と復旧の重要性を訴えた。また、今回の要望書提出に際しては、同年



写真 14 熊本県知事・教育長への要望書提出



写真 15 熊本市長への要望書提出

11月11日毎日新聞「戦争遺産を震災遺産に」記事、また熊本日日新聞12月8日「県内戦争遺跡に被害 震災遺産としての保存も」インタビュー記事の掲載があり、今後を見すえた啓発となった。

熊本県が独自にまとめた「復旧・復興へ向けた有識者会議」では、「創造的復興」の基本理念の下、20項目の提言が行われている。その中の「熊本地震の教訓を伝承」の項では、「地震を迫体験し、人々が復興に向けていかに頑張ったか」を学ぶ施設を整備すべきと提言している。

また、熊本市では平成28年10月策定「熊本市震災



写真 16 隈庄飛行場弾薬庫の被災状況

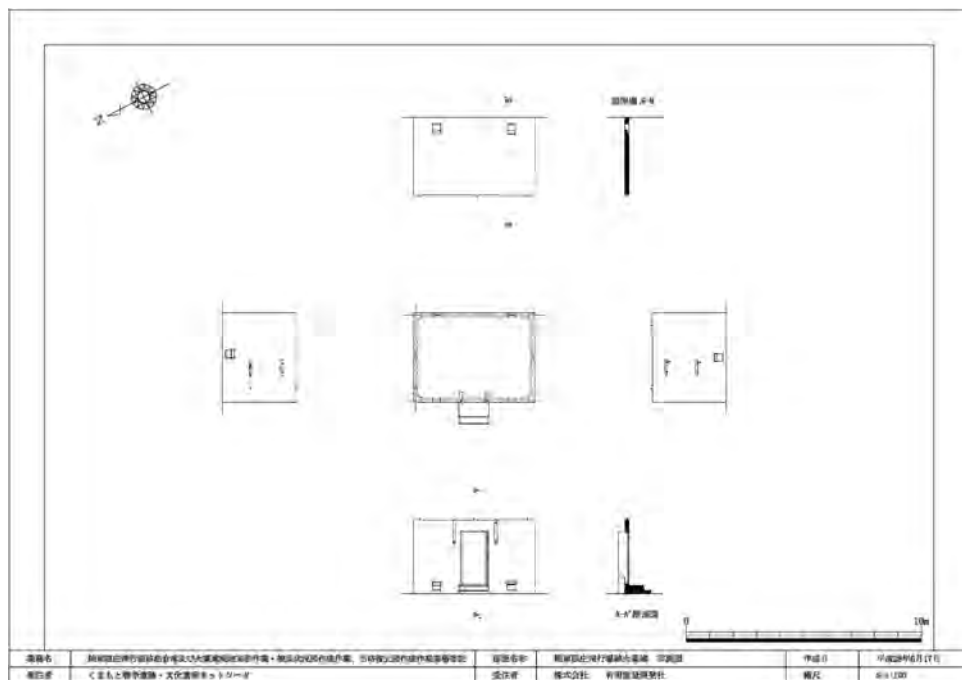


図 2 弾薬庫の被災状況図

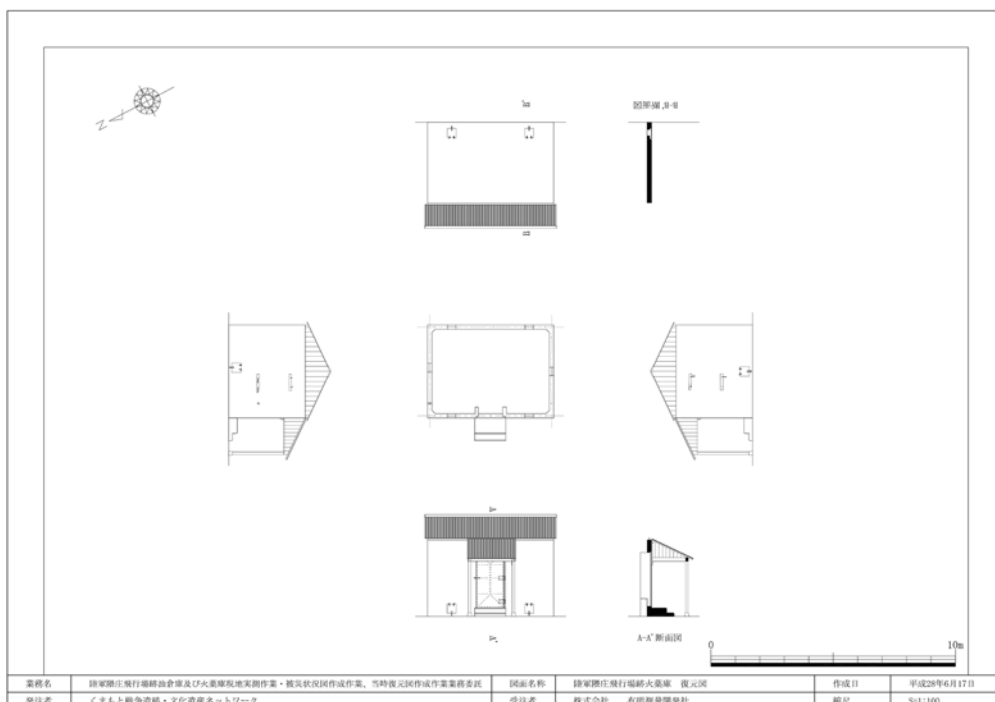


図 3 弾薬庫の想定復元図



写真 17 隈庄飛行場油倉庫の被災状況
西側壁面の崩落



写真 18 隈庄飛行場油倉庫の被災状況
東側壁面の亀裂

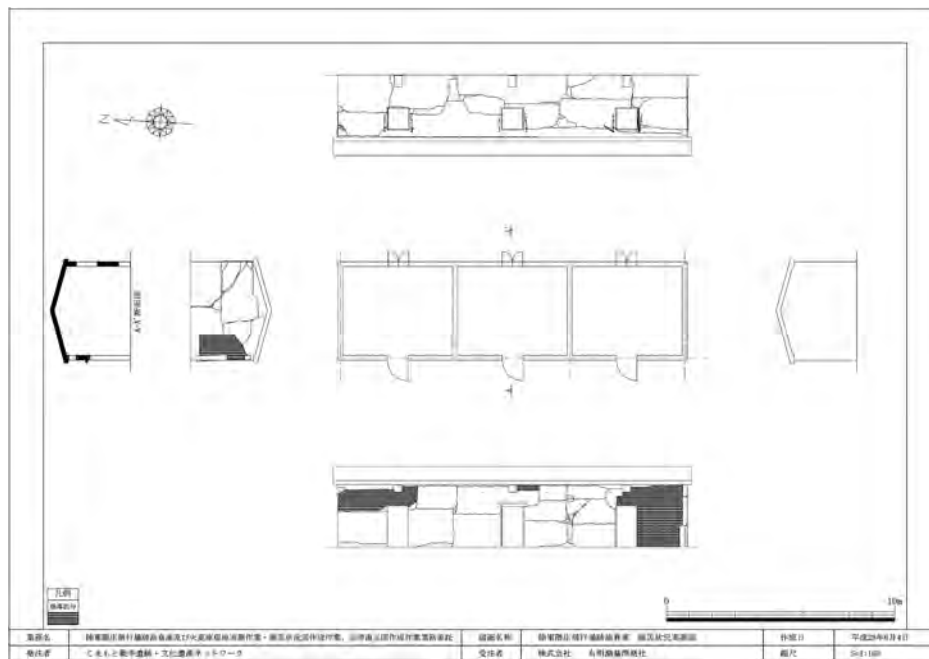


図 4 油倉庫の被災状況図

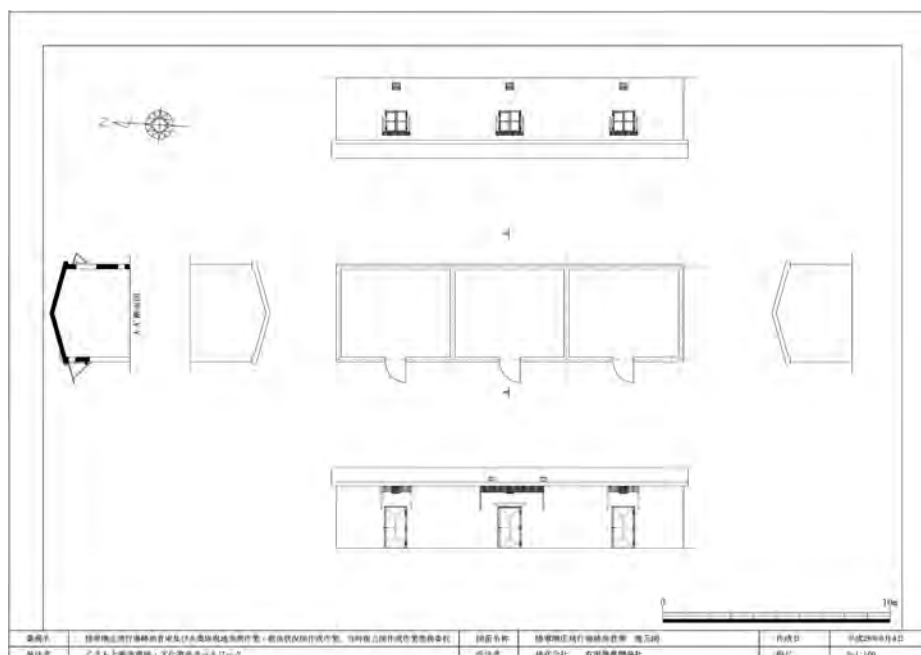


図 5 油倉庫の想定復元図

復興計画」において、5 項目の復興重点プロジェクトが示され「地震の記憶を次世代につなぐプロジェクト」での伝承の必要性が提言されている。

70 数年前の戦禍をくぐり抜けた陸軍隈庄飛行場油倉庫・弾薬庫を、熊本地震の「震災遺産」として認定し保存することは、これから全国どこでも起こりうる次の震災へ備え、記憶を継承する「戦争遺跡・震災遺産の保存」の新たな取り組みとなりうると考える。

[註 釈]

註 1 熊本日日新聞社平成 28 年 12 月 28 日現在の集計資料を引用使用。4 月 14 日午後 9 時 26 分:震度 7(M6.5)、4 月 16 日午前 1 時 25 分:震度 7 (M7.3)。県内被災では死亡 50 人、震災関連死 120 人、大雨による 2 次災害死 5 人の計 175 人

註 2 11 月県発表では、国・県指定文化財(登録・美術工芸品を含む全 685 件)の建造物を中心として 154 件、848 億円の被災額、市町村指定(全 2326 件)193 件、49 億円、未指定文化財の被害全容は不明、仮に 39 億円

で概算して総額 936 億円である。詳細は県 HP 等を参照
註 3 高谷和生他『熊本の戦争遺跡』創想舎熊本の戦争遺跡研究会 2010

註 4 本会作成「平成 28 年熊本地震での県内戦争遺跡被災リスト表(2 次調査までを集計)」平成 28 年 7 月 9 日現在。本会ブログ・ホームページ等で公開。

註 5 最新の測量技法である 3D デジタル測量調査は、株式会社「有明測量開発社」の全面的な支援で実現した。測量内容や被災状況をまとめた啓発資料「平成 28 年熊本地震による“陸軍隈庄飛行場油倉庫・弾薬庫”の被災状況」(A4 版両面カラー)は、熊本市立城南図書館等で 2 月初旬より、窓口配布を行っている。また、現地油倉庫横には啓発活動として隈庄飛行場の沿革、被災状況の写真、図面、新聞記事等を貼った説明看板を 1 月末から設置している。

註 6 熊本市への震災遺産としての保存要望は、9 月 27 日の文書通知、10 月 20 日の文化振興課長との意見交換、11 月 10 日の文化・スポーツ交流部長への面談・手渡し、計 3 回実施した。

資料 1 戦争遺跡保存全国シンポジウム長野県松代大会決議文

熊本地震で被災した「陸軍隈庄飛行場の油倉庫・弾薬庫」を 震災遺産の文化財として保存することを求める決議

2016 年 4 月 14 日・16 日、熊本県地方を襲った二度にわたる震度 7 の激震、1974 回を数える余震で、特別史跡「熊本城」、城下町を形成した「新町・古町地区」の街並み、国重文「阿蘇神社楼閣」、熊本の近代を形創った洋学校「ジェーンズ邸」をはじめ、県内の多くの文化財が被災しました。

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワークの調査では、熊本県内戦争遺跡総数は、多数の特殊地下壕を含め 723 件ですが、7 月 9 日集計で 31 件の被災が確認できました。その内訳は、熊本城横の高橋公園内の第六師団長官舎正門の倒壊、熊本学園大学で第二体育館として使用されている歩兵第十三聯隊食堂・酒保所の建物亀裂、天井の一部落下をはじめ建造物・記念碑・資料館で 25 箇所が被災。特殊地下壕では、陸軍大刀洗航空廠菊池分廠の飛熊地下工場第 2 号壕では入口天井部崩落、三菱重工業熊本航空機製作所の向坂地下工場では土砂流入し陥没するなど、5 箇所が被災しました。

また、熊本の戦争と平和のミュージアム「ピースくまもと(仮称)」の拠点施設としての候補建造物である旧通信省熊本貯金局(現熊本市役所花畑町別館)では、窓枠 3 か所に破損したものの躯体への大きな損傷は見られなかったのですが、応急危険度判定結果のみで熊本市は解体方針を決定いたしました。

特に今回の熊本地震での戦争遺跡最大の被害がみられたは、陸軍隈庄(くまのしょう)飛行場の油倉庫及び弾薬庫です。この地区には地下に活断層が走っており、弾薬庫横の地表には全長約 3m の亀裂が現れています。陸軍隈庄飛行場は、熊本市南区城南町舞原所在し「舞原(まいのはら)飛行場」の別称もあります。1941(昭和 16)年 10 月頃に完成し、当初は大刀洗陸軍飛行学校隈庄分教所として発足しました。1945(昭和 20)年 4 月には、重爆隊第一〇戦隊の配置がなされ、沖縄特攻の中継基地としても利用され、世界俳優である故三船敏郎さんがこの地で敗戦を迎えた有名な基地です。

油倉庫は、建築物本体がコンクリートブロック積み上げ壁、屋根コンクリート造、桁行(けたゆき)15.4 m、梁行(はりゆき)4.3 m、屋根高 2.5 m を図り、単独 3 部屋構造、正面には片開鉄扉・換気孔、裏面には両開鉄製窓、下側に換気孔も設置されています。今回の地震で建物は西南側壁が崩落し、東側に緩く傾き、応急危険度判定では「危険」(赤紙)とされました。また、弾薬庫は建築物本体はコンクリート造ですが、入口上部に亀裂が入りました。

熊本県が独自にまとめた「復旧・復興へ向けた有識者会議」では、「創造的復興」の基本理念の下、20 項目の提言が行われています。その中の「熊本地震の教訓を伝承」の項では、「地震を追体験し、人々が復興に向けていかに頑張ったか、を学ぶ施設を整備すべき」との提言内容です。71 年前の戦禍をくぐり抜け、熊本地震で被災した「陸軍隈庄飛行場油倉庫及び弾薬庫」の建物を、戦争の記憶を伝え、地震の教訓を伝える震災遺産の文化財として指定し保存することを、第 20 回戦争遺跡保存全国シンポジウム参加者の総意として関係行政機関に強く要望します。

2016 年 8 月 21 日第 20 回戦争遺跡保存全国シンポジウム長野県松代大会